

イエスご自身の言葉による十字架

ご自身の言葉による、十字架のもとでの三十日間

著作権・翻訳注記

Copyright © 2026 John Stephen Wright

All rights reserved.

聖書の引用はすべて著者自身の翻訳によります。

福音書の箇所は、著者の出版された四福音書の複合調和本『イエス・サーガ』から引用しています。

旧約聖書の引用は七十人訳聖書 (LXX) から翻訳しています。

その他の新約聖書の箇所はネストレ・アーラント第 28 版 (Novum Testamentum Graece) から翻訳しています。

著者の書面による事前の許可なく、本書のいかなる部分も、印刷された書評への短い引用を除き、いかなる形式においても複製、保存、または転送することはできません。

この PDF 全体は、完全な文書として自由に他の方々と共有していただいて構いません。

献辞

屠られた小羊に—
そして十字架のもとに立ち、
耳を傾けるすべての人に。

はじめに：イエスご自身の死について、イエスに耳を傾ける

キリスト者のすべての世代には、その時代の神学者と十字架についての説明がありました。私たちは豊かな伝統を受け継いでいます。パウロは教会に義認、和解、贖いという言葉を与え、ヘブライ書の著者は旧約聖書の祭司的なイメージの深みを開いてくれました。ペテロ、ヨハネ、そして他の使徒たちもそれぞれ、カルバリの意味について証言を残しました。

これらはすべて貴重なものです。神の靈感を受けた御言葉です。しかしこのシリーズは、より根本的な問いから始まります。イエスご自身は、ご自身の死についてどのように語られたのでしょうか。十字架の意味を最もよく理解しておられた方は、世界の創造の前からその十字架を選ばれた方ご自身です。

その答えは、多くの弟子たちが気づいているよりもはるかに豊かなものです。イエスは公生涯の最初から十字架について語られました。それを描写し、予告し、解釈し、全知と明確な目的をもって受け入れられました。渋々ではなく、確信をもってです。最初は好奇心旺盛なパリサイ人との夜の会話の中で語られ、次にエルサレムの神殿の庭で反対者たちに対して語られました。弟子たちには三度、増していく切迫感と決意をもって予告されました。最後の晩餐では、パンとぶどう酒を取り、血による新しい契約として説明されました。そして十字架の上で七度語られました。この七つの言葉こそ、そこで何が起こっていたのか、なぜそれが起こったのかについての、イエスご自身による最終的な解釈です。

イエスは十字架の上で沈黙した存在ではありません。ご自身について説明するのを他の人々に委ねておられるのでもありません。イエスは、ご自身の死の第一の解釈者です。

その確信がこの黙想シリーズの土台です。三十日間、私たちはイエスに耳を傾けます。初期の宣教活動からゴルゴタへ、そしてその先へと、十字架についてのイエスご自身の言葉を追っていきます。すべての道は御座の前へと導かれます。天の軍勢とともに、屠られた小羊はふさわしいと宣言するその場所へと。

このシリーズは、特定の神学的伝統の枠組みではなく、イエスご自身の言葉を通して十字架をより深く理解したいと願うすべての人のために書かれました。この三十日間は、十字架のもとに立ち、耳を傾けるための招きです。イエスに耳を傾けましょう。そこで何が起こったのか、そしてそれがなぜ永遠に重要なのかを、イエスご自身が語ってくださいます。

第一日

十字架についての最初の言葉

「モーセが荒野で蛇を高く掲げたように、人の子も高く掲げられなければなりません。それは、彼を信じ続けるすべての人が、神ご自身の命を永遠に与えられるためです。」

ヨハネ 3・14-15

エルサレムの真夜中、過越の週のことでした。イエスの公生涯はまだ四か月しか経っていません。ニコデモというパリサイ人が、ひそかにイエスのもとを訪れました。二人の会話は、人間存在の最も深い問い—人はいかにして新しく生まれることができるのか、神の国に入るとはどういうことか—へと進んでいきました。イエスが救いにおける聖霊の役割について説明を終えられたとき、ニコデモの予想をはるかに超えることを語られます。

イエスは民数記 21 章に記された、イスラエルの荒野の出来事へと立ち返られます。民は神に対して罪を犯し、その裁きとして毒蛇が彼らの間に送られました。多くの人が命を落としました。モーセが執り成すと、神は驚くべき指示を与えられました。青銅の蛇を作り、それを棒の上に高く掲げなさい、と。蛇に噛まれた者は皆、信仰をもってそれを仰ぎ見るならば、生きることができました。裁きのしるしが高く掲げられ、救い的手段とされたのです。この出来事を、イエスは静かにご自身へと重ねておられます。

「同じように」とイエスは言われます。「人の子も高く掲げられなければなりません。」

これが、イエスの宣教においてご自身の死について語られた最初の言葉です。イエスが選ばれたギリシャ語の動詞は、ヨハネ福音書全体を通して二重の意味を帯びています。肉体的に高く掲げられること、そして栄光へと高められることです。イエスはその両方を同時に見ておられました。十字架は、肉体的に高く掲げられる場所であると同時に、最大の栄光が現れる場所でもあります。世界が究極の恥と見なすものを、イエスは究極の啓示として見ておられました。

「なければなりません」という言葉に注目してください。これは偶然ではありません。宣教の初めから、イエスをご自身の死を神的必然として理解しておられました—それは夜明けと同じように避けることのできないものでした。

そしてイエスが約束される命は、単なる人間の命の延長ではありません。ギリシャ語の言葉はゾーエー。神ご自身の命の質、すなわち三位一体の命—を指しています。それはイエスを信じるすべての人に、無償で与えられるものです。これこそ、イエスが与えるために来られたものです。宣教の最初の深い対話の中で、すでにそれがご自身にとって何を意味するのかを明確に告げておられます。「人の子も高く掲げられなければなりません。」

十字架は決して後から思いついたものではありませんでした。それは初めから計画の中であり、今もなお私たちがそこへと招いています。

● 黙想のために

イエスはご自身の死を「高举」—神がいかなるお方であるかの最高の啓示—として見ておられました。これは、あなたが今日十字架を見る見方をどのように変えるでしょうか。

青銅の蛇には、信仰の行為—仰ぎ見ること—が求められました。今日あなたにとって、高く掲げられたイエスを信じ続けるとは、どのようなことを意味するでしょうか。

第二日

最初の予告：弟子たちに語り始める

「それからイエスは、ご自身がエルサレムに行き、長老たち、祭司長たち、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを、弟子たちに示し始められました。」
マタイ 16・21

ニコデモとの会話から、すでに二年以上が過ぎていました。ペテロは生涯最大の告白をしたばかりでした。「あなたこそメシア、生ける神の御子です。」その言葉が口を離れるや否や、イエスはこの勝利の瞬間を、苦しみと死についての教えへと転じられます。

「それから」とマタイは記しています—まるで新しい段階へと踏み出すかのように。それ以前はすべて準備でした。それ以降はすべて、十字架へと向かっていきます。

イエスは忍耐強く待つておられました。弟子たちの信仰が、これから告げられることに耐えうるほど確かなものとなるまで、彼らを養い続けてこられたのです。今、その時が来ました。イエスは死ぬことになる。イスラエルの指導者たちに引き渡される。殺される。そして三日後によみがえる。

ペテロの反応は、弟子たちがなお多くを学ばなければならなかったことを示しています。彼はイエスを脇に連れて行き、諫めました。「主よ、とんでもないことです。そんなことは決してあってはなりません。」それは愛から出た言葉でした。しかし、それは神の道を理解していない愛でもありました。イエスが言われるように、彼は人間的な視点から考えていました—神の目的を、成功や生存についての人間の基準で測っていたのです。

イエスの応答は即座でした。「下がれ、サタン。」この言葉は衝撃的です—荒野でサタンに向けられたのと同じ表現です。ペテロが悪霊に取り憑かれていたからではありません。この瞬間、彼は荒野でイエスが受けたのと同じ誘惑を差し出していたからです。十字架を迂回して王冠へ至る道を。イエスはそれ以前にもその試みに直面しておられました。ゲッセマネにおいても、再びそれに向き合うこととなります。そのたびに、答えは同じでした。

十字架は、イエスに不意に降りかかった悲劇ではありません。それは全知と完全な決意をもって受け入れられた使命でした。他に道はなかったのです。そしてその道は、今もなお私たちを招いています。

● 黙想のために

ペテロの諫めは愛から出たものでしたが、人間的な考えに形づくられていました。あなたの生活の中で、神の目的を人間的に合理的と思われる基準で測っている部分はどこでしょうか。

イエスは全知と完全な決意をもって十字架を受け入れられました。今日、そのような質の献身をもってイエスに従うとは、どのようなことでしょうか。

第三日

二度目の予告：それでも彼らには聞こえなかった

「人の子は人々の手に渡されます。彼らは彼を殺すでしょう。しかし殺された後、三日後によみがえるでしょう。」
マルコ 9・31

カイサリア・ピリポでの最初の予告から、数か月が経っていました。イエスは異邦人の地域で弟子たちを訓練しておられました。今、エルサレムへ向かって南下する前の最後の時として、ガリラヤを通過して戻っておられます。そして再び、このことを告げられます。

この箇所は簡潔です。長い説教もありません。弟子への叱責もありません。ただ、繰り返される事実のみです。人の子は引き渡される。殺される。三日後によみがえる。ルカは、イエスが語る前に異例の切迫感をもって命じられたと付け加えています。「これから話すことをよく聞きなさい。」イエスは、弟子たちが最初のときに本当の意味では聞いていなかったことをご存じでした。

その通りでした。マルコとルカはともに、弟子たちは理解できず、尋ねることを恐れ、深い悲しみに満たされていたと記しています。その意味は、ルカによれば「彼らには完全に隠されていた」のです。言葉は耳に届いていましたが、心には届いていませんでした。征服する王として来られるメシアへの何世紀もの期待によって形づくられた彼らの理解には、十字架につけられるメシアの入る余地がなかったのです。

まだ受け取ることのできない真理に、私たちはどのように向き合えばよいのでしょうか。イエスの答えは、語り続けることでした。理解されないからといって教をやめることはなさいません。繰り返しが働いていることを、たとえ目に見える結果がなくても信じておられます。この混乱と悲嘆に満ちた心に蒔かれた種は、復活がすべてを明らかにするときに芽吹くでしょう。

イエスは、弟子たちがまだ理解できていない現実のために、前もって彼らを備えられます。理解してから前進することを求められるのではありません。ただ、そばに留まり、聞き続け、従い続けることを求められるのです。

● 黙想のために

神が繰り返しあなたの注意を向けようとしているにもかかわらず、受け取ることが難しかったことはありますか。今日、それに心を開くとはどのようなことでしょうか。

イエスは弟子たちがまだ理解できないときにも、彼らを備えておられました。これはあなた自身の霊的形成についての考え方をどのように形づくるのでしょうか。

第四日

「そのとき、あなたがたはわたしが誰であるかを知るだろう」

「あなたがたが人の子を高く掲げるとき、そのとき、わたしがそれであることを知るでしょう。わたしは自分の判断では何もせず、ただ父が教えてくださったことを話しているのです。わたしを遣わされた方はわたしとともにおられます。わたしをひとり残してはおかれませんでした。わたしはいつも御心にかなうことをしているからです。」 ヨハネ 8・28-29

状況は大きく変わっていました。イエスはもはや弟子たちと私的に語っておられるのではありません。仮庵祭のただ中、エルサレムの神殿の庭で、反対者たちと公然と対峙しておられます。彼らは二度尋ねました。「あなたは誰ですか。」その答えが示されたとき、それは誰も予想していなかったものでした。

「あなたがたがわたしを高く掲げるとき—そのとき、知るでしょう。」

十字架は、イエスのアイデンティティについての論争の終わりではありません。それこそが答えなのです。彼らがイエスを逮捕し、断罪し、十字架に釘付けにするとき—彼らがイエスを滅ぼすつもりでいるその行為そのものが、イエスの最高の自己啓示の瞬間となります。

再びイエスは「高く掲げられる」という動詞を用いられます—肉体的な十字架刑という意味と、栄光への高举という意味の両方を込めて。反対者たちには到底理解できなかったでしょう。十字架につけられた人間は高められません。十字架につけられた者は、神に呪われ、見捨てられた存在と見なされるのです。まさにその逆説こそ、イエスが示しておられる点です。彼らがイエスに不利な究極の証拠と考えるものを、イエスはご自身が誰であるかの究極の啓示として受け止めておられます。

何が明らかにされるのでしょうか。「わたしがそれである」ということです。ギリシャ語のエゴ・エイミーは、燃える柴のもとでモーセに告げられた神の御名を響かせています。イエスはご自身がイスラエルの神であると主張しておられます—そして十字架がそれを否定できないものにするのだと語られるのです。

では、十字架はどのようにして神性を明らかにするのでしょうか。このように愛することができるのは神だけだからです。これほどまでにへりくだり、恵みに満ち、善であられるのは神だけです。人間の罪の全重荷を引き受け、なお赦しをもって応じることができるのは神だけです。十字架は「わたしはそれである」という宣言に矛盾しません。それはその最も完全な現れなのです。

● 黙想のために

イエスは、ご自身のアイデンティティがご自身の死において最も明確に示されると言われました。十字架は、他の何もかも伝えることのできない神についてのどのような真実を、あなたに語っているのでしょうか。

「わたしはいつも御心にかなうことをしています。」イエスはこれらの言葉を十字架の影の中で語られました。今日、あなたが同じ一つのことへの集中をもって生きることは、どのようなことでしょうか。

第五日

世界が始まる前から存在した愛

「わたしが自分の命を捨てるのは、それを再び得るためです。それゆえ、父はわたしを愛してくださっています。誰もわたしから命を取りません。わたしは自分からそれを捨てるのです。わたしには命を捨てる権威があり、また再び得る権威があります。この命令をわたしは父から受けました。」
ヨハネに 10・17-18

「わたしは父が命じてくださったことを行います。世界が、わたしが父を愛していることを知るためです。」
ヨハネ 14・31

ほとんどの人は十字架に向き合うとき、こう尋ねます。十字架はどのようにして私に対する神の愛を示しているのだろうか、と。それは良い問いです。しかし、イエスがご自身の死について語られるとき、最初に答えられる問いはそこではありません。

イエスは別のところから始められます。三位一体の内側から始められます。

ヨハネ 10 章で、来たるべきご自身の死について語りながら、イエスは誰も予期していなかったことを言われます。「わたしが自分の命を捨てるから、それゆえ父はわたしを愛してくださっている。」十字架は、まず御父と御子の間の愛の表現である、とイエスは言われています。他の何かである前に――赦しである前に、救いである前に、歴史において人類への最大の愛の行為である前に――それは御子が命を捨てることによって御父の愛が表される出来事なのです。

そして死の前夜、ゲッセマネに向かつて弟子たちと歩みながら、イエスは逆の方向からもう一度語られます。「わたしは父が命じてくださったことを行います。世界が、わたしが父を愛していることを知るためです。」

二つの言葉。合わせると、私たちがしばしば見落としているかたちで十字架を枠づけています。十字架は神の内側から始まるのです。それは二つの愛の出会いの場です――御父の御子への愛、そして御子の御父への愛。御父は御子が命を捨てるから御子を愛されます。御子は御父を愛するから命を捨てます。この愛は創造の前から存在しています。十字架はその完全な表現です。

そして、そこで見るものは義務ではありません。イエスはゲッセマネへ諦めをもって向かわれたわけではありません。愛をもって向かわれました。尽きることのない御父への愛をもって、ご自身の権威において自由に向かわれたのです。十字架はイエスの選択でした――代価の高い、自発的な選択でした。

十字架の前に立つとき、あなたは神があなたのためにしてくださったことを見えています。しかし同時に、神ご自身の内側を見させていただいているのです。十字架はまず三位一体の心への窓なのです。

十字架において現された愛は、ここから始まります。わたしたちからではありません。御父と御子との間にある、神の本質そのものである永遠の愛から始まるのです。

すべてはここから流れ出ています。

● 黙想のために

イエスはこの道を選ばれました。ご自身の権威によって、御父への愛ゆえに。義務ではなく、永遠の愛からです。

十字架は、あなたに届く前に、まず神の内側から始まりました。イエスがあなたに与えてくださったものが、まず御父への愛の中にあったのだと知るとき、あなたはそれをどのように受け取るでしょうか。

第六日

良い牧者：逃げることのない愛

「わたしは良い牧者です。良い牧者は羊のために自分の命を捨てます。」ヨハネ 10・11

「これよりも大きな愛はありません。友のために自分の命を捨てることです。」

ヨハネ 15・13

十字架に現された愛がどこから始まるのかを見てきました—御父と御子の永遠の関係の内側からです。今、イエスはその愛がどこへ向かうのかを示されます。

それは羊のもとへ向かいます。

良い牧者は危険が来ても逃げません。雇われた者は逃げます。彼には羊への本当の愛がありません。羊は彼のものではないからです。狼が現れると、彼は代価を計算し、立ち去ります。しかし良い牧者は留まります。狼と群れの間に自らを置きます。そして自分の命を捨てます。

イエスは、これこそが良い牧者であることの意味だと語られます。イエスの定義によれば、良さとは犠牲において表される愛です。羊はイエスのものです。だからこそ、イエスは逃げません。

この比喩は、聞いていた人々にすぐに理解されたでしょう。羊を飼うことはロマンティックな仕事ではありませんでした。危険で、孤独で、代価の高い働きでした。狼が来たときに留まる牧者は、英雄的なことをしているわけではありません。ただ愛する羊に忠実であるのです。イエスはその忠実さを、考えうる最高の表れへと高められます。危険を冒すだけでなく、命そのものを代価として留まる牧者なのです。

そして死の前夜、ヨハネ 15 章で、イエスはそれがどれほどの代価であり、どのような意味を持つかをはっきりと語られます。「これよりも大きな愛はありません。友のために自分の命を捨てることです。」抽象的に語っておられるわけではありません。数時間後にご自身がなさることについて語っておられるのです。これが、イエスご自身がご自身の行為に対して置かれる基準です。宇宙の歴史において、これ以上遠くまで到達した愛はありません。これからも決してないでしょう。

十字架は、これまでに起こり、これからも起こりうる人々への最高の愛の行為です。人類の歴史における他のすべての愛の行為は、ここにその源と基準を持っています。イエスは単に愛の模範を示されたものではありません。ご自身の命という代価をもって、愛とは何かを定義されたのです。

御父と御子の間の永遠の愛は、三位一体の内側にとどまりませんでした。自らを注ぎ出しました。羊のもとへ向かいました。あなたのもとへ向かいました。

● 黙想のために

イエスは最大の愛を、すべての本能が「逃げよ」と叫ぶときに留まることとして定義されます。今日、神はあなたに—関係において、誓約において、召しにおいて—逃げるのではなく留まるようにと呼んでおられるでしょうか。

「これよりも大きな愛はありません。」イエスはこの基準をご自身の死に対して置かれます。イエスがそれを世界が見た最大の愛と名指しておられるのを聞くとき、あなたがイエスの犠牲を受け取る仕方はどのように変わるでしょうか。

第七日

友と呼ばれた敵：愛が無条件である証拠

「これよりも大きな愛はありません。友のために自分の命を捨てることです。わたしが命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友です。わたしはもはやあなたがたをしもべとは呼びません。しもべは主人が何をしているか知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びます。父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからです。」

ヨハネ 15・13-15

「しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストはわたしたちのために死んでくださいました。それによって、神はわたしたちへの愛を示されました。」 ローマ 5・8

十字架に現された愛が三位一体ご自身の永遠の愛であり、人々のために注ぎ出されたものであることを見てきました。しかし一つの問いが残ります。この愛が真に無条件であることを、私たちはどのように知ることができるのでしょうか。その確かな証拠は何でしょうか。

イエスはその問いに、誰のために死なれるのかを告げることによって答えられます。

ヨハネによる福音書において、「世界」は中立的な言葉ではありません。神に反抗する人類を意味します。敵です。これがイエスが来られた相手です。これがイエスがゲッセマネへ向かっておられる相手です。そして、これが数時間後にイエスが十字架の上で死なれる相手です。

その彼らを、イエスは友と呼ばれます。

彼らがイエスのために何かをしたからではありません。イエスははっきりとそう語られます。「父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからです。」イエスの友情は、完全にイエスご自身の贈り物です。御父から受けたすべてのものを—ご自身の命を含めて—自由に彼らと分かち合われました。彼らは何も持ってきませんでした。イエスがすべてを与えられました。

これが無条件の愛の意味です。条件を見逃す愛ではありません。いかなる条件も満たされる前に行動する愛です。ふさわしさを待たない愛です。敵意から友情を生み出し、敵を友と呼び、その呼び名を真実とするために死ぬ愛です。

パウロはこの事実を見て、はっきりと言いました。「わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストはわたしたちのために死んでくださいました。」わたしたちが変わった後ではありません。わたしたちが信じた後でもありません。わたしたちがなお以前のままであったとき—敵として、よそ者として、反対者として—イエスは死なれました。十字架は神へのわたしたちの愛に応えたものではありません。それに先立ちました。そして、それを可能にしました。

だからこそイエスは、わたしたちに敵を愛するよう命じられます。それは、わたしたちがどれほど遠く及ばないかを示すための不可能な理想ではありません。神がわたしたちのためにすでになされたことの描写です。わたしたちが敵を愛するのは、神がわたしたちを愛された

ときにまさにそれをなされたからです。わたしたちが敵でした。わたしたちは、死によって神が造られた友なのです。

十字架に現された愛が無条件であるのは、神学的な範疇としてではなく、生きられた現実として—考えられる最高の代価をもって、考えられる最も値しない受け取り手に対して、一つの条件も満たされる前に—示されたからです。

イエスはふさわしい者のために死なれたわけではありません。わたしたちのために死なれたのです。

● 黙想のために

イエスはあなたを友と呼ばれます—あなたがしたことゆえではなく、あなたがそれに値する前に、イエスが自由に与えることを選ばれたゆえにです。神へのあなたの愛に先立ち、それを生み出した神の愛を知るとき、神の前でのあなた自身の見方はどのように変わるでしょうか。

「敵を愛しなさい」は命令であるだけでなく、まず神があなたのためになされたことの描写です。あなたの人生の中に、神があなたを呼んでおられる人—その人が値するからではなく、あなた自身が受けた愛の性質ゆえに—愛すべき相手はいるでしょうか。

第八日

三度目の予告：今は何も隠されていない

「わたしたちはエルサレムへ上って行きます。そして人の子について預言者たちが書いたことはすべて成就するでしょう。人の子は異邦人に引き渡され、嘲られ、侮辱され、唾をかけられます。彼らは人の子を鞭打ってから殺します。しかし人の子は三日目によみがえりません。」
ルカ 18・31-33

「人の子は仕えられるためではなく仕えるために来ました。そして多くの人のための身代金として、自分の命を与えるために来たのです。」
マタイ 20・28

今回は何かが違いました。イエスが一言も語られる前に、弟子たちはそれに気づきます。マルコは、弟子たちが驚き、後に従う者たちが恐れたと記しています。イエスはひとり先を歩いておられ、その姿に表れた決意はあまりにも明らかでした。弟子たちは、このようなイエスを見たことがありませんでした。エルサレムはまだ数日先ですが、その現実はすでにイエスの一步一步に刻まれていました。

イエスが十二人を集めて語られるとき、何一つ省かれません。この三度目の予告は、三つの中で最も詳細です。裏切り。断罪。異邦人への引き渡し。嘲り。唾。鞭打ち。十字架刑。復活。まるで、世界が始まる前から知っておられた台本を読み上げているかのように、各要素が順に語られます。

ルカはそれをこう粹づけます。「人の子について預言者たちが書いたことはすべて成就するでしょう。」これは悲劇ではありません。これまで語られてきた最も大きな物語の完成なのです。

それでもルカは、もう一度、弟子たちは何一つ理解しなかったと記します。知性の問題ではありませんでした。彼らは、ただ聞いていることを受け入れることができなかったのです。苦しむメシアという概念は、彼らの期待の中に入り込む余地がありませんでした。

その理解のなさを示すのが、次に起きた出来事でした。イエスが裏切りと鞭打ちと死について語られた直後に、弟子たちは誰が最も偉いかにについて言い争い始めたのです。イエスは、地の底から偉大さを再定義する言葉で答えられました。「人の子は仕えられるためではなく仕えるために来ました。そして多くの人のための身代金として、自分の命を与えるために来たのです。」身代金とは、捕われた者を解放するために支払われる代価です。イエスは単に死のうとされていたわけではありません。罪と死によって捕われているすべての人の自由を買い取ろうとしておられたのです。

これが、イエスが行列の先頭でひとり歩いておられたときに担っておられたものです—まだ誰一人として、ともに担うことのできなかつた重みです。六ヶ月前、イエスはこう言われました。「わたしには受けなければならないバプテスマがあります。それが成し遂げられるまで、わたしはどんなに苦しむことでしょう。」(ルカ 12・50) その苦しみとは、完全な愛が、代価を完全に知りながら至高の犠牲へと向かう重みでした。

イエスには死刑判決が下され、首には懸賞金がかけていました。それでもイエスはエルサレムへの道を、堂々と、急ぐことなく歩まれました。定められた時が来る前に、誰もご自身の命を奪うことはできないとご存じだったからです。

イエスは歴史の犠牲者ではありません。

イエスは歴史の主です。

● 黙想のために

イエスのご自身の死を身代金—捕われた者を解放するために支払われる代価—として語られました。イエスの死が単なる犠牲ではなく、解放であったとは、あなたにとってどのような意味を持つでしょうか。イエスはあなたを何から身代わりに買い取られましたか。

弟子たちが、イエスが十字架へ向かって歩いておられる間に偉大さについて言い争っていたことを思い起こしてください。「仕えられるためではなく仕えるために」というイエスの偉大さの定義は、あなた自身の生き方にどのような問いを投げかけているでしょうか。

第九日

父よ、御名の栄光を現してください：十字架の前の最後の言葉

「今わたしの魂は深く永続的に動揺しています。何と言おうか。『父よ、この時からわたしをお救いください』と言おうか。いや、わたしはまさにこの時のために来たのです。父よ、御名の栄光を現してください。」
ヨハネ 12・27-28、32 より

「わたしはすでに栄光を現した。再び栄光を現そう。」
ヨハネ 12・28

「わたしは地から上げられるとき、すべての人をわたしのもとの引き寄せます。」

ヨハネ 12・32

受難週の月曜日のことです。イエスは勝利のうちにエルサレムに入られました。イスラエルの境を越えた異邦人であるギリシャ人たちが過越祭に来ており、イエスに会いたいと願っています。彼らの到来は、イエスに喜びと悲しみを同時にもたらしました。諸国民がイエスのもとの来る—それが十字架の目的です。そしてその十字架は、四日後に迫っています。

イエスの宣教において三度目で最後となる、御父が天から声で語られる場面です。最初はイエスの洗礼のとき。二度目は変容のとき。そして今、十字架を数日後に控えて、御父は再び語られます。三度とも、それは十字架に関わるものでした。イエスの宣教における御父の声は、他のすべてにまさって重要なこの一つの出来事のために備えられていたかのようです。

この瞬間のイエスの祈りは、特に心を打ちます。イエスは来たるべきことから救われることを求められません。イエスの魂は深く、持続する苦悩の中にあります—それでも祈られるのは「父よ、御名の栄光を現してください」です。「わたしを救ってください」ではありません。「もっと楽にしてください」でもありません。御父の栄光は、イエスにとってご自身の命よりも重いのです。

そして、ヨハネによる福音書で三度目となる「高く掲げられる」という言葉が語られます。しかも、最も広がり大きいかたちです。

「わたしは地から上げられるとき、すべての人をわたしのもとの引き寄せます。」

ギリシャ語の動詞は強い意味を持ちます。継続的で、力強い引き寄せを示しています。十字架は、限られた範囲にとどまる局所的な出来事ではありません。それは歴史の中心であり、すべての人間を神の愛へと引き寄せ続けています。イエスが四日後になさることは、再び来られるその時まで、すべての文化とすべての世代にわたって影響を与え続けるでしょう。

これは、イエスが死の前にご自身の死について公に語られた最後の言葉です。イエスはこの時のために来られました。そこから顔を背けることはありません。そしてそれが成し遂げられるとき、何一つ以前と同じではなくなります。

● 黙想のために

イエスはご自身の人生で最も深い苦悩の中で「父よ、御名の栄光を現してください」と祈られました。今日、あなたが直面している状況の中で、この祈りを自分のものとするとはどのようなことでしょうか。

「わたしはすべての人を引き寄せます。」あなたもその一人です。イエスが今もあなたをご自身のもとに引き寄せておられると知るとき、十字架の前に立つあなたの姿勢はどのように変わるでしょうか。

第十日

「わたしについて書かれていることは、今、成就しようとしている」

「彼は罪人たちの中に数えられた」と書いてあります。わたしはあなたがたに言います。この聖書の言葉はわたしにおいて成就されなければなりません。そうです、わたしについて書かれていることは、今、成就しようとしているのです。 ルカ 22・37 (イザヤ 53・12)

過越祭の食事は終わりに近づいていました。ユダは裏切るために席を立っていました。弟子たちは不安でした。部屋の空気は重苦しいものでした。そのときイエスは、他のすべてを切り裂くことを言われます。

イエスはイザヤ 53・12 を引用されます。わずか六つの言葉：「彼は罪人たちの中に数えられた。」そして言われます。「これはわたしのことです。これはわたしにおいて成就されなければなりません。」

これは並外れた重要性を持つ言明です。イザヤ 53 章は偉大なしもべの詩—他者の罪を負い、そのとがのために刺し通され、告訴者の前で沈黙し、屠場に引かれる羊のように導かれ、彼らの咎を負うことによって多くの人を義とする人物を描く詩—です。何世紀もの間、ユダヤの民はこの箇所を読んできました。それが自分自身についてのことだと言ったラビは一人もいませんでした。

イエスはそれがご自身のことだと言われます。示唆によってではありません。暗示によってでもありません。死の前夜の食卓で、平明な言葉で、直接に言われます。

これが重要なのは、イエスがご自身の死を代替—他者の立場に立ち、彼らが受けるべきものを負うこと—の観点から理解されていたことを示しているからです。イザヤは何世紀も前にそれを書きました。イエスは今、それが成就される数時間前に、それをご自身の使命の宣言として主張されます。

イエスは罪人たちの中に数えられるために来られました。それは歴史の偶然ではありません。それこそが要点です。イエスはたまたま犯罪者たちの傍らで殺されたものではありません。罪人たちに数えられたのです—罪人たちが受けるべき立場を取り、罪人たちだけがイエスが受けるにふさわしい立場を取ることができるように。

イエスは何の中に歩み入ろうとされているかを正確にご存じでした。それでも歩み入られました。

● 黙想のために

イエスはイザヤ 53 章をご自身の使命として主張されました。今日、イザヤ 53 章をゆっくりと読んでください。どの言葉があなた個人のためにイエスがなされたことを描写していますか。

イエスは「罪人たちの中に数えられ」ることを選ばれました。イエスが意図的に裁きを受けるべき者の立場を取られたことは、あなたにとってどのような意味を持ちますか。

第十一日

血による新しい契約

「これはあなたがたのために与えられるわたしの体です。わたしを覚えて、これを繰り返し行いなさい。この杯はあなたがたのために注がれる、わたしの血による新しい契約です。わたしを覚えて、これを繰り返し行いなさい。」
ルカ 22・19-20

イエスはパンを取られます。感謝をささげられます。それを裂き、弟子たちに与えられます。そしてその意味を告げられます。

「これはわたしの体です。あなたがたのために与えられます。」

杯を取られます。感謝をささげられます。それを回されます。

「これはわたしの血による新しい契約です。あなたがたのために注がれます。」

このような言葉を、食卓の場で語った者は、それまで誰もいませんでした。イエスは過越の食卓に着いておられます——イスラエルの契約の食事、神がエジプトの奴隷状態からご自身の民を救い出されたことを毎年記念する食事です。過越祭は犠牲を中心に成り立っていました。血が戸口の柱に塗られました。子羊が初子の代わりに死にました。この食卓に着くすべての人は、生涯にわたり毎年この食事を守ってきました。

しかし今、イエスはこの食事をご自身を中心に再定義されます。イエスご自身がパンです。イエスご自身が杯です。イエスご自身が犠牲です。古い契約は動物の血によって封じられました。新しい契約は、イエスご自身の血によって封じられます。イエスは犠牲をささげる祭司であると同時に、ささげられる子羊でもあられます。

「契約」という言葉は、証人によって確証される拘束力のある約束を意味します。しかし契約は、それを結ぶ者の死によって初めて有効になります。流された血は、死が起こったことを示します。契約は今、有効となります。

神はエレミヤとエゼキエルを通して、新しい契約——赦しの契約、変えられた心、神と人との新しい関係——を約束しておられました。イエスは言われます。その契約は今夜から始まります。そして明日の十字架によって封じられます。イエスの血は、それが永遠に有効であることの確かな証しです。

イエスは弟子たちに、ただ一つのことを求められます。「わたしを覚えなさい。」教師としてではありません。預言者としてでもありません。新しい契約を可能にするために、ご自身の体と血を与えた方として。彼らがこのパンを食べ、この杯を飲むたびに、イエスの死を告げ知らせます——イエスが来られる日まで。

● 黙想のために

イエスは「これはあなたがたのために与えられるわたしの体です」と言われました——この言葉は個人的で、きわめて具体的です。イエスは「罪人」という一般的な範疇のために死なれたわけではありません。あなたのために死なれたのです。十字架のこの個人的な次元は、今日あなたの心にどのように響いていますか。

新しい契約は、イエスがなされたことの上に完全に築かれており、わたしたちがすることの上にはありません。今日あなたが最も受け取る必要のある、新しい契約の約束は何でしょうか。

第十二日

ゴルゴタへの道：自分のことを顧みない愛

兵士たちはイエスを連れて行く途中、田舎から来ていたキレネ人シモンをつかまえ、十字架を負わせてイエスの後ろから運ばせました。大勢の民衆と、イエスのために泣き悲しむ女たちがついて来ました。イエスは彼女たちの方に向き直って言われました。

「エルサレムの娘たちよ、わたしのために泣くな。自分自身と自分の子どもたちのために泣きなさい…」
ルカ 23・26-28

イエスが十字架を動機づける愛について語られてから、まだ十二時間も経っていません。イエスは逮捕され、夜通し裁判にかけられ、鞭打たれ、頭を何度も殴られ、嘲られ、茨の冠をかぶせられました。今、朝の九時、兵士たちはイエスを街の外、ゴルゴタ——どくろの地——へと連れ出します。

イエスは十字架をそれほど遠くまで運ぶことができません。失血、ショック、頭部への繰り返し打撃。ローマ総督官邸から城門まで、およそ半マイルの道のりで、もはやその重みに耐えることができなくなります。兵士たちはキレネから来た異邦人シモンという男を徴用し、強制的に十字架を担がせます。

シモンの存在は意味深いものです。本来なら、この瞬間イエスのそばを歩いていたのはペテロであるはずでした——しかしペテロは街のどこかで、三度の否認に打ちのめされています。その代わりに、見知らぬ異邦人が、強制的に仕えさせられます。マルコはシモンの息子たちをアレキサンデルとルポスという名で記しています——まるですべての読者が彼らを知っているかのように。シモンは信者となりました。意に反して担った十字架が、彼の入り口となったのです。

しかしルカの記述の中心はシモンではありません。道沿いでイエスのために泣いている女たちと、イエスの応答です。イエスは立ち止まり、振り向かれます。そして釘が打たれる直前のその瞬間に、これから起こるすべてを完全に意識しながら、彼女たちにご自身のためではなく、自分自身と子どもたちのために泣くよう告げられます。イエスを拒んだエルサレムには、イエスがすでに見通しておられる結果が訪れるのです。

これが最初からイエスを定義してきた、自己を忘れた愛です。イエスはご自身を救いながら他者を救うことはできませんでした。だからこそ、イエスは他者のことを思い、ご自身のことをまったく顧みられませんでした。

わたしたちの黙想は今、十字架の前日に立っています。明日、イエスは十字架の上から語り始められます。イエスが言われる一言一言に、注意深く耳を傾けましょう。イエスはその言葉を語るために、三年間備えてこられたのです。

● 黙想のために

シモンは自分の意志に反して十字架を担い、やがて信者となりました。神はこれまで、あなたが選ばなかった奉仕へとあなたを導き、それをイエスへの歩みの入口として用いられたことがあるでしょうか。

ゴルゴタへの道でのイエスの最後の行為は、他者を思うことでした。今日、十字架から語られるイエスの言葉を本当に聞くために、あなたは何を脇に置く必要があるでしょうか。

第十三日

十字架上の第一の言葉

「父よ、彼らをお赦してください」：釘からの祈り

彼らがゴルゴタ——「どくろの地」と呼ばれる場所——に来ると、そこで彼らはイエスを十字架につけました。二人の犯罪者も一緒に——一人は右に、もう一人は左に。朝九時頃、彼らはイエスを十字架につけました。

イエスは繰り返し言い続けておられました。

「父よ、彼らをお赦してください。彼らは自分が何をしているか、わかっていないのです。」

ルカ 23・33-34；マルコ 15・25

福音書の記者たちは、それをきわめて簡潔に記します。「そこで彼らはイエスを十字架につけました。」釘の描写はありません。肉体的な苦悩の詳細もありません。ローマ世界のすべての人が、十字架刑の意味を知っていました。記者たちは理解していたのです。イエスの十字架について決定的なのは肉体的苦しみ——それが現実であり、言葉にできないほどであったにしても——ではなく、イエスの死が成し遂げたことです。彼らは恐怖に留まりません。直ちに、はるかに驚くべき現実へと読者を導きます。

イエスは祈っておられます。しかし、その祈りの内容に耳を澄ませてください。

ルカはギリシャ語の未完了時制を用いて、この祈りが釘が打たれた瞬間に一度だけ語られたものではなかったことを示しています。イエスは繰り返し言い続けておられました——十字架刑の最初の数時間を通して、何度も。兵士たちがイエスの衣服をかけて賭けをする中で。群衆が侮辱を浴びせる中で。イエスの死を画策した宗教指導者たちが見物している中で。そのすべてのただ中で、同じ祈りが繰り返しイエスの唇からささげられていました。

「父よ、彼らをお赦してください。彼らは自分が何をしているか、わかっていないのです。」

「彼ら」に誰が含まれるかを考えてみてください。イエスに釘を打った兵士たち。イエスを断罪した指導者たち。無実と知りながら判決を下したピラト。イエスを否認したペテロ。逃げ去った弟子たち。そして、この死を必要とした罪によって、すべての世代のすべての罪人——あなたとわたしを含めて。イエスのために誰も祈っていなかったとき、イエスはわたしたちすべてのために祈っておられました。

この祈りは決して容易なものではありませんでした。それは、御父との密接な交わりの中で長年生きてこられた結果です——御父の臨在の中で過ごされた生涯から流れ出た祈りです。イエスは偉大な大祭司として死につつ、全人類の赦しのために執り成しておられました。十字架からのイエスの最初の言葉は祈りでした。そしてイエスの死そのものが、その祈りへの答えとなりました。

● 黙想のために

イエスは敵のために、彼らがまさにイエスを殺している最中に祈られました。あなたの人生の中に、このような祈りが不可能に感じられる人はいますか。今日、その人を神の御前に差し出してください。

罪を神に告白するとき、あなたはこのイエスの祈りに同意しているのです——赦しを勝ち取るためではなく、イエスの祈りと死がすでに確保した赦しを受け取るために。この事実を知るとき、あなたが神のもとに近づく姿勢はどのように変わるでしょうか。

第十四日

十字架上の第一の言葉（続き）

「彼らは知らないのです」：赦しの広がり

父よ、彼らをお赦してください。彼らは自分が何をしているか、わかっていないのです。

ルカ 23・34

この祈りの中に、見過ごしやすいけれども重大な重みを持つ言葉があります。「知る」です。「彼らは自分が何をしているか、わかっていないのです。」イエスは処刑者たちの言い訳をされているわけではありません。彼らの罪が本物ではないと言っておられるのではありません。もっと正確なことを言っておられます。彼らは自分たちが誰を殺しているのかを知らない、ということです。

兵士たちは自分たちが宇宙の創造主を十字架につけていることを知りませんでした。宗教指導者たちは自分たちが生涯研究してきたまさにその聖書を成就していることを知りませんでした。ピラトは自分が永遠の結果をもたらす決断をしていることを知りませんでした。群衆は自分たちが嘲っている男が、自分たちの心の最も深い叫びに答えることのできる唯一の方であることを知りませんでした。彼らの無知は無罪ではありませんでした—しかしそれは現実であり、イエスは軽蔑ではなく憐れみをもってそれを名指しされました。

これが最も純粋な形での無条件の愛です。イエスは宣教を通じてそれを教えてくれました。敵を愛しなさい、迫害する者のために祈りなさい、憎む者に善を行いなさい。今、救おうとして来られた人々によって十字架に釘づけにされながら、最も極端な状況の下でそれを示されます。美德を実演しておられるわけではありません。本性を啓示しておられます。これがイエスの本質です。

罪を神に告白するとき、わたしたちは神が知らなかったことを知らせているのではありません。わたしたちは同意しています—ギリシャ語で告白を意味する言葉はホモロゲオー、同じことを言うという意味です—イエスがすでに祈り、すでに支払いをなされた祈りと代価に。わたしたちの赦しは午前九時に祈られました。午後三時までに完全に支払われました。わたしたちはそれが真実であると信じることによって受け取ります。

地上にこのような愛はかつてありませんでした。世界はかつてこのようなものを見たことがありませんでした。神の御子が、ご自身を殺している者のために御父に赦しを求めながら、敵のために死んでおられるのです。

● 黙想のために

イエスは弁明することなく、それが彼らの言い訳にならないことを知りながら、人々のために憐れみをもって祈られました。あなたに対して罪を犯した人で、あなたが責め続けている人はいますか。今日、その人をこの祈りの広がりの中に持ち来ることができますか。

罪を告白することは、それについてイエスに同意することです—赦しを勝ち取るためではなく、イエスの祈りと死がすでに確保したものを受け取るために。今日、イエスとともに同意する必要があることは何ですか。

第十五日

十字架上の第二の言葉

嘲りと、それを見抜いた男

「通りかかった人々はイエスを侮辱しました。祭司長たちと律法学者たちもイエスを嘲りました。兵士たちもイエスを嘲りました。犯罪者の一人がイエスをののしりました。「あなたはメシアではないか。自分と私たちを救え。」
マタイ 27・39、41

しかし、もう一人の犯罪者は彼を戒めて言いました。「あなたは神を恐れないのか。私たちは正当な報いを受けている。しかしこの人は何も悪いことをしていない。」そして彼は言いました。「イエスよ、あなたが御国に来られるとき、わたしを覚えていてください。」

ルカ 23・35-42

嘲りは波のように押し寄せました。最初はエルサレムへ向かう道を行き交う人々。次に、この瞬間を迎えさせるために何か月も動いてきた宗教指導者たち。次に兵士たち。そして最後には、両側に掛けられていた犯罪者たちまでもが加わりました。

福音書の記者たちは、この流れに意図的な構図を描いています。嘲りは、最も遠くにいる者から最も近くににいる者へと近づいていきました。見知らぬ通行人から指導者へ、兵士へ、そしてイエスのすぐ隣で死にかけている者へ。すべての層の人々が加わりました。誰一人としてイエスを弁護する者はいませんでした。栄光の主は、人間の軽蔑のただ中に掛けられ、そのすべてを受けながら、なお彼らの赦しのために祈っておられました。

嘲りの内容は、皮肉なことに真実を含んでいました。「他人を救った。自分自身は救えない。」彼らはそれをあざけりとして口にしました。しかしその言葉は、結果的に神学を語っていました。イエスは他者を救いながら、ご自身を救うことはできませんでした。救い主であるためには、ご自身を救うことを拒むほかに道はなかったのです。彼らは、自分たちが思っている以上に正確なことを語っていました。

そのとき、変化が起こります。犯罪者の一人——ほんの少し前までイエスをののしっていたその男が、沈黙します。彼はイエスを見ました。自分自身を見ました。そして心の向きを変えました。彼は、このように自分を殺そうとしている人々のために祈り、これほどの軽蔑を受けながらも反撃せずに耐え忍ぶ人を、これまで見たことがありませんでした。

彼は仲間の犯罪者を戒めました。「わたしたちは当然の報いを受けている。しかしこの人は違う。」そして、福音書の中でも際立った信仰の行為として、十字架の上で死にかけているこの方を、やがて御国に来られる王として呼びかけました。

「イエスよ、あなたが御国に来られるとき、わたしを覚えていてください。」彼は十字架の向こうにある王冠を見通しました。イエスが最も弱く見えるその時に、この人は信じたのです。

● 黙想のために

犯罪者は、群衆や指導者や兵士たちには見えなかったものを、イエスの中に見ました。イエスの死に方のどのような点が、あなたの目を開き、イエスが誰であることを示していますか。

嘲る群衆は、知らずに真実を語りました。イエスはご自身を救うことによって他者を救うことはできなかつたのです。この犠牲は、今日あなたが救いを受け取る姿勢をどのように形づくっていますか。

第十六日

十字架上の第二の言葉（続き）

「今日、あなたはわたしとともにパラダイスにいるでしょう」

イエスは彼に答えられました。「まことに、あなたに言います。今日、あなたはわたしとともにパラダイスにいるでしょう。」
ルカ 23・43

「今日、あなたはわたしとともにパラダイスにいるでしょう。」原文で七つの言葉です。誰も予期できなかった約束でした。それは、最もあり得ない受取人に、最もあり得ない瞬間に与えられました。死にかけた犯罪者が、何も差し出すものがなく、もはや違う生き方をする時間もなく、ただ覚えていてほしいと願います。イエスは、その願いに答えて、彼にパラダイスを与えられます。

その男がしなかったことに注目してください。彼は洗礼を受けていませんでした。イエスの宣教を通してイエスに従っていたわけでもありません。奇跡を目撃したわけでもなく、弟子としての実りを示したわけでもありませんでした。ほんの数分前まで、嘲りの声に加わっていました。イエスのもとに持ってきたものは、文字どおり何もありませんでした——必要と、自分の罪についての正直さと、イエスが無実であるという確信と、そして自分の隣で死にかけているこの方が本物の王であるという信仰を除いては。

それで十分でした。今日もなお、十分なのです。

イエスが与えられる約束は、深い意味を含んでいます。「今日」——それは遠い未来の裁きの日を指しているわけではありません。今日です。数時間のうちに。死は終わりではなく、イエスご自身の臨在へと移されることです。「わたしとともに」——パラダイスは第一に場所ではなく、人格に結びついた現実です。イエスが宣教を通して約束し続けてこられた永遠の命は、信じる者と分かち合われる三位一体の命であり、信じた瞬間から始まります。「パラダイス」——この言葉はペルシャ語に由来し、王の庭園を意味します。王が愛する者のために備えた、美しさと豊かさに満ちた場所を指しています。

イエスの前に立つすべての人は、究極的にはあの二人の犯罪者のどちらかです。自分の罪を認め、イエスの無実を認め、イエスの憐れみに自らを委ねるか——あるいは、残された息を使って、イエスに自分の条件でご自身を証明することを求め続けるか。わたしたちは悔い改めるか、あるいは悔い改めないままにいるかのどちらかです。悔い改めた犯罪者は、何も持たずに来て、すべてを受け取りました。それが、驚くべき一つのやり取りの中に示された福音です。

● 黙想のために

犯罪者は、必要と信仰以外、何も持たずにイエスのもとに来ました。あなたは、イエスが求めておられないもの——あなたの業績や努力——をイエスのもとに持って行こうとする誘惑を感じていませんか。

「わたしとともに。」イエスにとってパラダイスは、ご自身の臨在によって定義されます。この事実は、あなたが永遠の命について考えるとき、何を本当に望んでいるのかをどのように形づくるでしょうか。

第十七日

十字架上の第三の言葉

「婦人よ、これがあなたの息子です」：新しい家族の誕生

イエスの十字架のそばには、イエスの母、母の姉妹、クロパの妻マリア、そしてマグダラのマリアが立っていました。イエスは母と、そばに立っている愛する弟子を見て、母に言われました。「婦人よ、これがあなたの息子です。」次にその弟子に言われました。「これがあなたの母です。」その時から、この弟子は彼女を自分の家に迎え入れました。

ヨハネ 19・25-27

三時間が過ぎました。最初の二つの言葉——赦しの祈りと悔い改めた犯罪者への約束——は、外に向けて語られていました。敵と見知らぬ人に向けられていました。今、イエスのご自身を愛し、十字架のそばに立っている小さな群れに目を向けられます。群衆は大勢でしたが、忠実にとどまった者たちは少数でした。その中には、母マリア、その姉妹、マグダラのマリア、そして使徒ヨハネがいました。

イエスは家族の中で長男でした。ヨセフが亡くなった後、マリアの世話はイエスが担ってこられました。今この場においても、イエスはその責任を果たされます。母とヨハネに語りかけ、その言葉によって、まったく新しい関係を生み出されます。それは、血のつながりのない二人の間に結ばれる家族の絆であり、イエスの十字架からの言葉によって形づくられたものです。

「婦人よ、これがあなたの息子です。」この呼びかけ——「母よ」ではなく「婦人よ」——は、冷たいものでも距離を置いたものでもありません。カナの婚宴で用いられたのと同じ呼び方であり、敬意を込めた言い方です。イエスはマリアを、地上の息子としてのイエスへの依存から解き放ち、より大きなものを与えられます。それは、イエスが死によって創り出そうとしておられる新しい霊的家族の中の場所です。

この第三の言葉は、最初の二つの言葉が暗示していたことを、よりはっきりと示します。赦しと永遠の命は、個人的に与えられ、個人的に受け取られる贈り物です。しかし、それはそこで終わりではありません。それらは帰属へと導きます。神の家族への帰属へと導きます。そこでは、血筋や背景によって築かれてきた壁が、イエスがこの十字架の上で注ぎ出しておられる愛によって打ち壊されます。イエスはこの一致のためにヨハネ 17 章で祈られました。そして今、十字架の上から、それを現実のものとして与えます。

ヨハネは、その時からマリアを自分の家に迎え入れました。この静かな従順の行為は、イエスが死によって創り出された新しい霊的家族の最初の具体的な表れでした。まずイエスに属することによって、互いに属し合う人々の家族です。

● 黙想のために

イエスは、年齢や血のつながりの境界を越えて霊的家族を創り出され、母を息子ではない若い弟子に委ねられました。神はあなたの人生に、あなた自身では選ばなかったかもしれない境界を越えた霊的家族として、誰を置いておられるでしょうか。

十字架があなたに回復を求めている、別の信者との壊れた関係はありますか。気づいていながら放置してきた、誰かの必要はありませんか。

第十八日

三時間の闇

正午（第六時）から午後三時（第九時）まで、全地が暗くなりました。太陽の光が失われたからです。
ルカ 23・44-45；マルコ 15・33

十字架の上で語られた最初の三つの言葉は、すべて最初の三時間——朝九時から正午まで——に語られました。そして、その後、空が暗くなりました。

これは日食ではありませんでした。過越祭は満月の時期に行われます。日食は起こりえません。これは超自然的な闇でした。神の御子が世の罪を負っておられたその時間に、地を覆った闇でした。創造そのものが、ゴルゴタで起きている出来事に応答していたのです。

三時間、イエスは沈黙のうちにわたしたちの罪を負われました。闇の時間について、福音書は言葉をほとんど記していません。群衆はまだそこにいました。嘲りは続いていたかもしれませんが、しかし、正午から三時まで、物語は静まります。まるで福音書の記者たちが、その時間に起きていたことは言葉で十分に表すことができないと理解していたかのようです。罪なき神の御子が、人類の積み重ねられた悪の重みをその身に負っておられました。闇は、それにふさわしいものでした。それは、ゲッセマネで逮捕されたときにイエスが言われた言葉を思い起こさせます。「今はあなたがたの時、闇の支配する時です。」

闇はまた、しるしでもありました。聖書全体において、闇は神の裁きと結びついています。エジプトに下った暗闇の災い。主の日のしるしとして預言者たちが語った太陽の暗転。今、罪ある人類が創造主に対して行っていることのゆえに、そしてその創造主が罪ある人類のために耐えておられることのゆえに、太陽は光を隠しました。この二つの現実は同時に真実でした。人間がなした最悪のことと、神がなしておられる最善のことが、同じ時に、同じ場所で起こっていました。

今日わたしたちは、ただイエスとともに闇の中に立ちます。それを説明しきるためでもなく、復活へと急いで進むためでもありません。三時間の闇は、代価の一部です。それは「神はどのように世を愛された」という言葉の意味の一部でもあります。

● 黙想のために

イエスがわたしたちの罪を負っておられる間、三時間、闇が大地を覆いました。イエスがこれを沈黙のうちに、あなたのために耐えられたという事実は、あなたにとってどのような意味を持つのでしょうか。

わたしたちは時に、苦しみから解決へと急ぎがちです。あなたの人生の中に、神がより正直に向き合うように求めておられるのに、急いで通り過ぎてきた事柄はありませんか。

第十九日

十字架上の第四の言葉

「わが神、わが神」：闇からの宣言

午後三時ごろ、イエスは大声で叫ばれました。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ？」
——これは「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味です。

マルコ 15・34；マタイ 27・46

三時間の闇が終わりました。午後三時です。そしてイエスは叫ばれます。大声で、幼いころから祈りに用いてこられた言語であるアラム語で。信者たちを長く悩ませ続けてきた言葉を叫ばれました。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。」

これは引用です。詩篇 22 篇の冒頭の言葉です。

イエスの時代、聖書は章や節に分けられてはいませんでした。巻物には子音だけが記され、文字の間に空白も句読点もありませんでした。ただ、途切れることなく続く文字の列があるだけでした。それぞれの詩篇は、その最初の言葉によって識別されていました。わたしたちが歌を冒頭の言葉で呼ぶのと同じです。イエスがこの言葉を叫ばれたとき、聖書に親しんでいた人々——過越祭のエルサレムに集まっていた多くの人々——はすぐに理解したはずで、イエスが詩篇 22 篇全体を指し示しておられるのだ、と。これは宣言です。

詩篇 22 篇は、旧約聖書の中でメシアの苦しみを最も詳しく描いている箇所の一つです。周囲の者たちに嘲られ、手と足を刺し通され、衣服をくじで分けられる人が描かれています。その細部の多くが、その日ゴルゴタで現実となっていました。兵士たちはすでにイエスの衣服をくじで分けていました。敵たちは、詩篇の言葉を嘲りとしてイエスに向けていました。これは十字架の物語の中で詩篇 22 篇が思い起こされる三度目の場面であり、その中でも決定的なものです。

イエスは冒頭の言葉を叫ぶことによって、詩篇全体を呼び起こされました。「この詩篇は、今まさに成就している」と示しておられたのです。そして重要なのは、詩篇 22 篇が見捨てられたままで終わらないということです。「地のすべての果ては思い出して主に立ち帰る」という宣言で終わります。イエスは絶望を表しておられたのではありません。苦しみのただ中で、勝利を指し示しておられたのです。

● 黙想のために

イエスは十字架の上からさえ、聖書の言葉を用いてご自身の死を解釈されました。あなたは、自分の苦しみを解釈できるほどに、聖書の言葉を心に蓄えていますか。

詩篇 22 篇は勝利の宣言で終わります。イエスはそれを敗北としてではなく、成就のしるしとして引用されました。このことを知るとき、今日あなたがイエスの叫びを聞く仕方はどのように変わるでしょうか。

第二十目

十字架上の第四の言葉（続き）

イエスが十字架の上で引用された詩篇

地のすべての果ては思い出して主に立ち帰り、国々のすべての氏族はあなたの前にひれ伏すでしょう…まだ生まれていない民に、「主がこれを行われた」と告げ知らせるでしょう。

詩篇 22・27、31

詩篇 22 篇は、大きく四つの部分から成っています。冒頭は、イエスが十字架の上で引用された荒廃の叫びです。見捨てられたと感じる者の苦悩が率直に語られます。続いて、信頼の告白へと移ります。詩篇の作者は、神がこれまで常に真実であられたことを思い起こし、その真実にすがります。さらに、苦しみの具体的な描写が続きます。骨は外れ、力は干上がり、手と足は刺し通され、衣服は分けられます。そして最後に、この詩篇は壮大な展望へと開かれていきます。地の果てに至るまで人々が主に立ち帰り、すべての氏族が主の前にひれ伏し、まだ生まれていない民にまで宣言が伝えられるのです。「主がこれを行われた」と。

十字架上でのイエスの叫びは、第一節だけを取り出したものではありませんでした。それは詩篇全体を指し示すものでした。イエスは、この詩篇が今まさに成就しつつあることを示しておられたのです。苦しみの現実だけでなく、その先にある結末——諸国民の立ち帰り、後の世代にまで及ぶ宣言——をも含めて。

ヘブライ書の著者は、詩篇 22 篇の中心部分を引用し、それを復活されたキリストの言葉として記しています。「わたしはあなたの御名を兄弟たちに告げ知らせ、会衆の中であなたを賛美しましょう。」（ヘブライ 2・12、詩篇 22・22）十字架の苦しみを通られた方が、復活後、兄弟たちの中で賛美を導かれるのです。

詩篇 22 篇の一節から結びに至る流れは、福音の流れそのものでもあります。荒廃から始まり、苦しみを経て、やがて勝利と諸国への宣言へと至ります。

イエスは苦しみのただ中であっても、ご自身の死が諸国民に及ぶことを知っておられました。四日前に語られた言葉——「わたしは地から上げられるとき、すべての人をわたしのもとに引き寄せます」——は、ここで詩篇の言葉と重なります。主の前に全地がひれ伏すという希望は、十字架の中にすでに含まれていました。

あなたは、詩篇 22 篇が見据えていた「まだ生まれていない民」の一人です。イエスが十字架の上で引用されたその詩篇の結末には、あなたも含まれています。

● 黙想のために

イエスのご自身の死を敗北としてではなく、諸国に広がる宣言の始まりとして見ておられました。この視点は、あなたが受け取った救いの意味をどのように深めるでしょうか。

詩篇 22 篇は、荒廃から信頼を経て勝利へと進みます。今、あなたはその流れのどこに立っているでしょうか。

第二十一日

十字架上の第四の言葉（続き）

見捨てられたのか——イエスが十字架の上で失われたもの

「わたしを遣わされた方は、わたしとともにおられます。わたしをひとり残してはおかれませんでした。わたしはいつも御心にかなうことをしているからです。」 ヨハネ 8・29

「主はあなたを離れず、あなたを見捨てることは決してありません。」 ヘブライ 13・5

詩篇 22 篇が投げかける問い、そしてイエスの第四の言葉がわたしたちに残す問いは、教会が長く向き合ってきたものです。イエスは十字架の上で、実際に御父から切り離されたのでしょうか。三位一体は分断されたのでしょうか。

この問いに答えるには慎重さが求められます。イエスがわたしたちに代わって耐えられた苦しみを軽く見ることはできません。しかし同時に、御父と御子が本質的に分離されたと考えることもできません。神は永遠に三位一体であられ、その一致が損なわれることはありません。十字架において何が起こったにせよ、神が三位一体であることをやめられたわけではありません。

では、イエスは何を失われたのでしょうか。

それは、御父の臨在を意識的に味わう経験でした。

イエスは宣教の全期間を通して、御父との絶え間ない交わりの中に生きておられました。「わたしを遣わされた方は、わたしとともにおられます」という言葉は、単なる神学的宣言ではなく、イエスの日々の現実でした。御父の臨在は、イエスの歩みの土台であり、平安と喜びの源でした。

十字架の上で、わたしたちの罪を負われたとき、イエスはその臨在を意識的に感じるのではない状態を経験されました。神の近さを感覚として持たないという、人間が罪の中で生きるときに知るあの暗さを、イエスは内側から味わわれました。それは、御父との永遠の交わりの中に生きてこられたイエスにとって、測り知れない深みを持つ苦しみでした。

しかし、それは三位一体の断絶ではありませんでした。むしろ、罪を負われたキリストが、わたしたちの孤独と闇のただ中に入ってくくださった出来事でした。

イエスはそれを耐えられました。わたしたちが永遠に神から離れたままであることがないように。イエスが見捨てられたかのような闇を通られたゆえに、わたしたちには神との交わりが開かれています。

インマヌエル——神はわたしたちとともにおられる。この約束は、十字架を経ても失われません。むしろ、十字架によって確かなものとされました。

● 黙想のために

イエスは、神の臨在を感じられない闇の中に入られました。あなたがその闇に永遠にとどまらなくてよいように。このことは、神が遠く感じられるとき、あなたの理解をどのように支えますか。

イエスは感覚ではなく信頼に立ち続けられました。神の近さを感じられないときでも、神を信頼するとは、あなたにとってどのような意味を持つでしょうか。

第二十二日

十字架上の第五の言葉

もう一つの愛の行為——最後の従順

「その後、すべてのことがすでに成し遂げられたことを知り、聖書が成就するために、イエスは言われた。『わたしは渇く。』そこに酸いぶどう酒の入った器が置いてあったので、人々はヒソプの茎にスポンジを含ませてイエスの口に差し出した。」 ヨハネ 19・28-29

渇きは十字架刑に伴う偶発的な苦しみではありませんでした。血の損失、直射の中でさらされる体、呼吸するたびに伴う激しい負担は、体から急速に水分を奪っていきました。イエスは六時間にわたってそれに耐えておられました。これより前に、痛みを和らげる飲み物が差し出されましたが、イエスは受けられませんでした。苦しみを鈍らせることなく、そのただ中にとどまられました。

しかしヨハネは、この言葉の前に一つの重要なことを記しています。イエスは、すべてがすでに成し遂げられたことを知っておられました。御業は完了していました。預言は成就していました。なすべきことは残されていませんでした。

それでも、イエスは語られます。

それは安堵のためではありませんでした。苦しみを終わらせるためでもありませんでした。すべてが成し遂げられた後でなお、イエスは聖書の一つの言葉をその身において満たそうとされました。

詩篇 69 篇にはこうあります。「彼らはわたしが渇いているときに酸いぶどう酒を飲ませた。」イエスはこの言葉を知っておられました。そして、それが今ご自身の歩みの中で満たされるべきものであることを認められました。

これは義務の追加ではありませんでした。贖いの完成に何かを付け加えるためでもありませんでした。御業はすでに成し遂げられていました。それでもなお、御父への従順は最後の瞬間まで途切れることがありませんでした。

「わたしは渇く。」その一言は、苦しみの自然な反応であると同時に、意識的な従順の行為でもありました。誰も気づかなくてもよい細部にまで、聖書を尊び、御父の御心を重んじる心がそこにありました。

わたしたちは、どこまで従えば十分かを考えがちです。しかしイエスは、御業がすでに完成しているその時にも、なお従う道を選ばれました。それは義務からではなく、愛からでした。

第五日に見たように、十字架は御父と御子の永遠の愛の中に根ざしています。その愛は、十字架の六時間の苦しみを通しても衰えることがありませんでした。最後の瞬間に至るまで、御父への信頼と従順は保たれていました。

十字架へと向かわせた永遠の愛から、最後の一言に至るまで——そこに現れているのは、終わることのない愛です。

● 黙想のために

イエスは、御業がすでに成し遂げられた後にも、なお従順を選ばれました。あなたはどの場面で「これで十分だ」と考えていますか。そこに、もう一步の愛はあるでしょうか。

贖いはすでに完成していました。それでもイエスは従われました。あなたの神への応答は、義務でしょうか、それとも愛でしょうか。

第二十三日

十字架上の第六の言葉

テテレスタイ——十字架の要石

「イエスはそのぶどう酒を受けると、言われた。『成し遂げられた。』」

ヨハネ 19・30a

イエスはその飲み物を受けられた後、第六の言葉を語られました。英語では複数の語で訳されますが、ギリシャ語では一語です。テテレスタイ。

これはテレオー（完成する、目的に至らせる、成し遂げる）の完了形です。ギリシャ語の完了形は、過去に完了した行為であって、その結果が現在に及び続けている状態を示します。イエスは単に「終わった」と言われたわけではありません。成し遂げられ、その効力が続いているという意味で語られました。

この言葉は古代社会において広い用法を持っていました。負債が完済されたとき、その証書に記された言葉でした。神殿においてささげ物が正しくささげられたときにも用いられました。依頼された仕事が意図どおりに完成したときにも使われました。負債、犠牲、御業——それぞれの領域で「完全に成し遂げられた/テテレスタイ」という意味を持っていたのです。

ヨハネはすでに 19・28 で、イエスがすべてが成し遂げられたことを知っておられたと記しています。今、イエスご自身がそれを宣言されます。これはご自身の確認のためではありません。イエスはすでに知っておられました。この言葉は、聞く者のための言葉です。

十字架でなされたことが十分であったのか。自分の罪は赦され得るのか。神の恵みは本当に完全なのか。こうした問いに対して、この一語は答えとなります。

テテレスタイ。

付け加える必要はありません。付け加えることもできません。成し遂げられたことは、そのまま完全です。

この一語の重みは深く、わたしたちはさらに二日間、この宣言の意味を受け止めていきます。

● 黙想のために

あなたは、いまだに自分が神に負っていると感じている何かを抱えていませんか。その中で、すでに「成し遂げられた」と宣言されているものは何でしょうか。

イエスはこの言葉を十字架の上で語られました。その宣言は、あなたに向けられています。すでに成し遂げられたという事実は、今日のあなたの歩みにどのような安心を与えるでしょうか。

第二十四日

十字架上の第六の言葉（続き）

何が成し遂げられたのか——完成された御業の広がり

「イエスはただ一度のささげ物によって、聖なるものとされていく人たちを永遠に完全なものとされた。」
ヘブライ 10・14

イエスが「成し遂げられた」と言われたとき、何が成し遂げられたのでしょうか。この問いは重要です。なぜなら、その理解が、わたしたちの神との関わり方を形づくるからです。

十字架上の最初の言葉は祈りでした。「父よ、彼らをお赦してください。」それは、大祭司としての執り成しでした。第六の言葉は、その執り成しが空しいものではなかったという宣言です。赦しを求める祈りと、その赦しを可能にする御業とが、ここで一つに結ばれています。

成し遂げられたのは、旧約の犠牲制度が長い年月にわたって指し示してきた現実でした。過越の子羊から始まり、祭壇でささげられ続けた数えきれない犠牲は、最終的なささげ物を予告する影でした。ヘブライ書はその違いを明確にします。旧い祭司たちは日ごとにささげ物を繰り返しましたが、それによって罪が完全に取除かれることはありませんでした。キリストは一度だけご自身をささげ、そして座られました。座られたという事実は、御業が完了したことを示しています。

また、成し遂げられたのは、メシアの苦しみに関する預言の成就でもありました。銀貨三十枚、衣服へのくじ、刺し通された手と足、三時間の闇——長い歴史の中で語られてきた言葉が、この一日において具体的な出来事となりました。

さらに、神と人との間にあった隔ては取り除かれました。神殿の幕が裂けた出来事は、「成し遂げられた」という宣言の目に見えるしるしです。近づく道は開かれました。

● 黙想のために

旧い犠牲は繰り返されましたが、キリストのささげ物は一度で十分でした。この事実は、あなたが神の前に立つときの心をどのように支えますか。

旧約の預言が十字架において具体的に成就しました。この歴史の連続性は、神の御計画について何を語っているのでしょうか。

第二十五日

第六の言葉（続き）

捧げ物はもう必要ない：聖霊がテテレスタイを証言する

イエスはただ一つの犠牲によって、聖なるものとされていく人たちを永遠に完全にされました。聖霊もまた、わたしたちにこのことを証言し続けておられます。まず主はこう言われます。「それらの日の後にわたしが彼らと結ぶ契約はこれである。わたしは彼らの心にわたしの律法を置き、彼らの思いにそれを書き記す。」さらにこう付け加えられます。「わたしは彼らの罪と彼らの不法な行いを決して思い出さない。」さて、これらのことの赦しがあるところでは、もはや罪のための捧げ物は必要ありません。

ヘブライ 10・14-18

「御霊はご自分からは語らず、聞いたことだけを語られます。」ヨハネ 16・13。御霊が完成した御業を証言するとき、それはイエスの宣言が今もなお響いているということです。御父は十字架について三度声高に語られました。御子は十字架の上からテテレスタイを宣言されました。そして今、御霊は証言し続けておられます。ヘブライ書で用いられている動詞は現在形であり、継続する証言を示しています。新しい契約の約束を通して、神はもはやわたしたちの罪を思い出されません。御父、御子、御霊は一つの声で語られます。完成した。テテレスタイ。

それを宣言することと、それを生きることとは同じではありません。この真理は、耳にするほど容易に受け取れるものではありません。人間の心は、本来、完成した御業の中に安らぐようにはできていません。わたしたちは努力するように造られています。罪責感が押し迫るとき、繰り返した罪のゆえに、あるいはその結果がなお周囲に影響を及ぼしている失敗のゆえに、人は何かをしようとし、自分を罰しようとし、より懸命に努力しようとし、その神学は誤りですが、その衝動そのものは深いものです。

この衝動を制度化した人々もいます。多くの文化において、人々はイエスがなされた支払いに何かを付け加えることができるという信念のもとで、自己苦行の形を実践します。しかし、それは付け加えることのできないものに付け加えようとする試みです。

イエスは言われたとおりに贖罪の御業を完成されたか、そうでなかったかのどちらかです。もし完成されたのであれば、わたしたちの罪に対する応答は一つです。罪についてイエスに同意すること、すなわち告白すること、そしてイエスが購われた赦しを受け取ることです。自分自身の支払いを付け加えようとすることは献身ではありません。それはイエスの血が十分ではなかったという意味を持ちます。

イエスの血は十分です。御霊はこれを証言されます。「わたしは彼らの罪と彼らの不法な行いを決して思い出さない。」ここで用いられている二重否定は強い強調です。それは神が忘れるという意味ではありません。神がそれらの罪を再び裁きの根拠として取り上げることは決してないという、取り消されることのない約束を意味します。「さて、これらのことの赦しがあるところでは、もはや罪のための捧げ物は必要ありません。」その件は永遠に終わっています。あなたは確実にゆるされています。

● 黙想のために

あなたがまだ自分自身で支払おうとしている罪や失敗はありますか。今日、神の前でそれを正直に名指しし、それに対してテテレスタイを受け取ることができますか。

あなたの負債が永遠に清算されたことを、単なる理論ではなく確かな事実として受け止めて生きるなら、あなたの神との日々の歩みにおいて何が変わるのでしょうか。

第二十六日

「父よ、あなたの御手にわたしの霊を委ねます」

神の唇に載った子どもの祈り

「イエスは大声で呼ばわって言われました。『父よ、わたしの霊をあなたの御手に委ねます。』」
ルカ 23・46

イエスの七番目で最後の言葉は、囁かれませんでした。ルカはイエスが大声で呼ばわれたと伝えています。これは見過ごせない細部です。十字架刑の最終段階にある者が、六時間の出血と脱水の後に大声で叫ぶことなどありません。空気も力も残っていないはずですが、それでもイエスは叫ばれました。それ自体が一つの証言でした——消し去られた命の敗北としてではなく、神の御子のご自身の死の瞬間を主権的に選ばれた行為として。

この言葉は即興ではありませんでした。詩篇 31 篇 5 節からの引用です。イエスの時代、敬虔なユダヤ人の親たちは子どもたちにこれらの言葉で毎日を終えるよう教えていました。就寝前に唱える祈り、眠りに落ちる前の最後の言葉として。イエスはこれらの言葉を何千回と祈ってこられました。そして今、死の瞬間に、幼少期から知っていた祈りへと手を伸ばし、御父に捧げられました。

その親密さを聞いてください。荒廃の叫びの後——「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」——暗闇と世の罪の重みの後、イエスは「父」という言葉を唇に載せて死なれました。「神よ」ではありません。「主よ」でもありません。父よ、と。その親密さの中に生きてこられ、その親密さの中に死なれました。

イエスは絶望の中で死なれませんでした。疑問の中でも、諦めの中でもなく、信頼の中に死なれました。ご自身の霊を意識的に御父の御手に委ねながら。十字架は御父と御子の関係を壊しませんでした。それを最も深いレベルで、最大の代価をもって表現したのです。

これが永遠の神の御子の、地上における生涯の終わりでした。子どもの祈りをもって、それを受け取ってくださる御父のもとへと。

● 黙想のために

イエスは想像できる最も極端な苦しみした後、御父を完全に信頼して幼少期の祈りを唇に載せて死なれました。神があなたに招いておられる信頼とはどのようなものか、このことはあなたに何を告げているのでしょうか。

イエスは「神よ」でも「主よ」でもなく「父よ」と言われました。子どもと父の親密さの中に死なれたのです。あなたはどのように神に近づきますか。子どもの親密さをもって、それとも主人の前のしもべの距離をもってでしょうか。

第二十七日

イエスは命を与えられました

神の御子の自発的な死

「誰もわたしから命を取りません。わたしは自分の意志でそれを捨てるのです。わたしには命を捨てる権威があり、また再び得る権威があります。この命令をわたしは父から受けました。」
ヨハネ 10・18

「それからイエスは頭を傾け、霊を渡されました。」
ヨハネ 19・30b

ヨハネはイエスの死について、見落とすことのできない二つの細部を記しています。七番目の言葉を語られた後、イエスは頭を傾けられました。そしてご自身の霊を渡されました。

どちらの動詞も能動態です。傾けられたのも、渡されたのも、イエスご自身の行為です。これは死に打ち負かされた人の姿ではありません。死を選んでいる人の姿です。

四ヶ月前、エルサレムの神殿奉獻の祭りで、イエスははっきりと言われていました。「誰もわたしから命を取りません。わたしは自分の意志でそれを捨てるのです。」ゲッセマネでの逮捕の瞬間からすでに、わたしたちはそのことが示されているのを見てきました。兵士たちが来たとき、イエスは前に出てご自身を示され、彼らは後ろに倒れました。大祭司のしもべの耳を癒されました。ピラトには、自分がイエスに対して持つ力は上から来るのでなければないと告げられました。苦痛を和らげる飲み物を断られました。祈られました。七度、目的をもって語られました。そして今、最後の行為として、ご自身が選ばれた瞬間に頭を傾け、霊を渡されました。

多くの男たちが十字架の上で死ぬのを見てきた百人隊長は、前例のないことが起きたと即座に悟りました。人々は十字架の上でこのようには死にません。自分の瞬間を選びません。最後に大声で叫びません。静かな決然さをもって頭を傾けません。百人隊長は宣言しました。「本当に、この人は義人だった——神の御子だった。」

イエスは死なれたように生きられました——完全に、自発的に、主権をもって。誰もイエスから命を取りませんでした。命は与えられたのです。諦めでも敗北でもなく、自由に選ばれた愛の究極の表現として。それは物語の終わりではありません。すべての歴史の転換点です。

● 黙想のために

イエスの十字架からの七つの言葉のうち三つは祈りでした。荒廃と暗闇を経ても御父との会話を保たれたとは、あなたにとってどのような意味を持つでしょうか。

百人隊長は、イエスが死なれた様子の中に、かつて見たことのないものを認識しました。信じようとして来たのではない人においてさえ認識を促す、イエスの死の何がそのような力を持っているのでしょうか。

第二十八日

荒廃から信頼へ

信仰の弧

「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。」 詩篇 22・1

「あなたの御手にわたしの霊を委ねます。」 詩篇 31・5

イエスの同時代人のほとんどは詩篇を暗記していました。毎日それを祈っていました。詩篇 22 篇と詩篇 31 篇は調べるべき遠い文書ではなく、幼少期からユダヤの信仰の生地に織り込まれた、生きた祈りでした。イエスもそれらを何百回と祈ってこられました。

イエスは十字架の上から、その両方を引用されました。数時間を隔てて、詩篇 22 篇の冒頭の叫びから詩篇 31 篇の結びの祈りへと移られたのです。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」から「あなたの御手にわたしの霊を委ねます」へ。これらの言葉を聞いたイエスの同時代人は、両方の詩篇を即座に認識したでしょう。これは偶然の引用ではありません。イエスが何をされているかを、聞く者は理解したはずです。

イエスは祈っておられました。演じておられたのでも、神学的な論点を立てるために聖書を引用しておられたのでもありません。苦悶の中にあって、幼少期から知っていた祈りへと手を伸ばしながら、暗闇を通る道をわたしたちに示しておられたのです。

ここに注目してください。イエスの十字架からの七つの言葉のうち三つは祈りでした。「父よ、彼らをお赦してください。」「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。」「父よ、あなたの御手にわたしの霊を委ねます。」そしてそれらは無作為に散らばっていたのではありません——第一、第四、第七でした。始まり、中間、終わり。祈りが全体の流れを枠組みし、錨として支えています。十字架は祈りで始まり、これまで祈られた中で最も深い祈りを通過し、祈りで終わります。その間のすべて——盗賊への約束、母への配慮、テテレスタイ、渇き——はその枠組みの中で起こるのです。十字架は宣言と完成であるだけでなく、最初の言葉から最後の言葉まで御父との持続的な会話として保たれていました。

詩篇 22 篇から詩篇 31 篇への弧は、その会話の弧です。詩篇 22 篇は深淵の中に開かれます——完全に孤独で、見捨てられ、敵に囲まれた者の叫び。詩篇 31 篇はまったく異なる場所から開かれます。「主よ、あなたにわたしは逃げ込みます。」イエスはその三時間の暗闇の中で、誰も他に負うことのできないものを負いながら、もはや感じることのできない御父にしがみつきながら、二つの詩篇のあいだの距離を横断されました。

これが最も極端な状況下での信仰の姿です。苦悩がないことではありません——イエスは暗闇を暗くないと装われませんでした。正直な叫びを黙らせることでもありません——イエスは詩篇 22 篇の言葉で荒廃を完全に声に出されました。しかし苦悩の下に、壊れなかった何かがあります。御父はまだそこにおられ、まだ善であり、まだ真実であるという信頼が。そして暗闇の向こう側に、子どものような祈りが。あなたの御手に。

イエスはわたしたちに道を示されました。暗闇の中にいるとき、詩篇 22 篇を祈りなさい。イエスがそうされたように、正直に叫びなさい。詩篇 31 篇へと至る招きがあなたにあります。御父との対話が続けなさい。

そしてあなたの前にその道を歩まれた方——暗闇を通り、御父の御手まで——が、今もあなたとともにその道を歩まれるのです。

● 黙想のために

イエスの十字架からの七つの言葉のうち三つは祈りでした。荒廃と暗闇を経ても御父との会話を保たれたとは、あなたにとってどのような意味を持つでしょうか。

イエスはご自身の死の時間の中で、詩篇 22 篇の叫びから詩篇 31 篇の信頼へと移られました。今日あなたはその弧のどこにいますか——叫びの中に、その間の暗闇の中に、それとも信頼へと向かうところにでしょうか。

第二十九日

天が応答する

裂けた幕と揺れる大地

「もし彼らが黙れば、石が叫ぶでしょう。」

ルカ 19・40

「そのとき、神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けました。地が揺れ、岩が割れ、墓が開いて、眠っていた多くの聖徒たちの体が生き返りました。」

マタイ 27・51-52

イエスは霊を渡されました。そして創造物が応答しました。

十字架の六日前、群衆はイエスがエルサレムに入られるときに賛美しました。宗教指導者たちが弟子たちを黙らせるよう求めると、イエスは答えられました。「もし彼らが黙れば、石が叫ぶでしょう。」その日、群衆は黙りませんでした。石が語る必要はありませんでした。

ゴルゴタでは違いました。群衆は去り、弟子たちは逃げていました。勝利のうちにエルサレムに入られた方が、ほぼ沈黙の中で死なれました。そして石が叫んだのです。

神殿の幕——外の聖所と神の臨在が宿る至聖所を隔てる厚い垂れ幕——が上から下まで真っ二つに裂けました。方向が重要です。下から人の手によって裂かれたのではありません。神が上から裂かれたのです。罪ある人類と聖なる神の間の壁——千五百年にわたるすべての律法、すべての犠牲、すべての祭司の儀式によって強化されてきた壁——が、その取り除きを義とする支払いを受け取られた神によって、一瞬にして取り除かれました。

至聖所はかつて、一年に一度、自分自身のものではない血をもった一人の祭司だけが入ることを許されてきました。今それは開かれています。ヘブライ書の著者はこう言います。「こうして、兄弟たち、わたしたちはイエスの血によって、大胆に聖所に入ることができます。幕、すなわちキリストのご自身を通して、わたしたちのために開かれた新しい生きた道によって。」（ヘブライ 10・19-20）裂けた幕は裂けた体です。開かれた聖所は、開かれた入り口です。入りなさい。

地が揺れ、岩が割れ、墓が開きました。死んでいた多くの聖徒たちが生き返り、復活の後エルサレムに現れました。彼らはしるしであり、イエスの死が可能にした収穫の手付金でした。

天と地が証言しました。神はわたしたちを隔てていたものを裂き、ご自身とわたしたちの間に立っていたすべてのものを揺さぶられました。

● 黙想のために

イエスはもし民が黙れば石が叫ぶと言われました。イエスの死のとき、石は叫びました。創造物自体が十字架を証言したとは、あなたにとってどのような意味を持つでしょうか。

幕は上から下まで——人間の努力によってではなく、神によって——裂けました。神の側から、神の主導で、神の代価をもって完全に開かれたあなたの神への入り口とは、あなたにとってどのような意味を持つでしょうか。

第三十日

屠られた小羊はふさわしい

十字架のもとでの頌栄

「わたしはまた見た。御座と生き物と長老たちを取り囲む多くの御使いたちの声を聞いた。その数は幾万幾千であった。彼らは大声で言っていた。『屠られた小羊こそ、力と富と知恵と勢いと誉れと栄光と賛美を受けるにふさわしい方です。』また、天と地と地の下と海にいるすべての造られたもの、そこにいるすべてのものがこう言うのを聞いた。『御座に座っておられる方と小羊に、賛美と誉れと栄光と力が、世々限りなくありますように。』」
黙示録 5・11-13

三十日前、わたしたちはある問いをもって始めました。イエスご自身は、ご自身の死についてどのように語られたか、と。

その答えは圧倒的なものでした。小羊は世界が始まる前から定められた目的に従って屠られました。イエスは完全な知識をもってそれを予告し、それに備え、主権の自由をもってその中に歩み入られました。十字架の前にそれを説明し、十字架の上から、神がなしておられたことの深みを開く七つの言葉でそれを解釈されました。そしてイエスの死は幕を裂き、大地を揺さぶり、墓を開きました。

それが成し遂げたことは量ることができません。神の愛の完全な啓示、わたしたちの罪の完全な赦し、御父と御子と御霊の生きた臨在への入り口。永遠の命は今始まり、永遠へと伸びていきます——新しい契約とその約束の中に封じられ、真理と喜びとイエスが約束された平和——「わたしの平和をあなたがたに与えます」——をもって届けられ、聖霊によってわたしたちの中に注がれ、決して尽きることなく。

人類の歴史において、イエスの死と同じ部類に属する死は一つもありません。

このような死に対して可能な応答はただ一つです。それは天と地がすでに行っている応答です。すべての創造物が御座の前で一つの声で叫んでいます。

屠られた小羊はふさわしい！

力を受けるにふさわしい——イエスはわたしたちを救うためにご自身の力を明け渡されたからです。

富を受けるにふさわしい——イエスはわたしたちが豊かになるために貧しくなられたからです。

知恵を受けるにふさわしい——イエスは世の知恵を混乱させるために十字架の見かけ上の愚かさを選ばれたからです。

勢いを受けるにふさわしい——イエスは弱さの中で十字架につけられ、力の中によみがえられたからです。

誉れを受けるにふさわしい——イエスは自己弁護なく、不名誉と恥と嘲りを受け入れられたからです。

栄光を受けるにふさわしい——イエスは十字架をご自身の栄光として扱い、ご自身の栄光を愛である神の啓示として扱われたからです。

賛美を受けるにふさわしい——イエスの十字架からの最初の言葉は処刑者たちへの祈りであり、最後の言葉は御父の御手への御子の信頼であったからです。

天にも地にも地の下にも海にもいるすべての造られたものが、御座の前に集まっています。礼拝の広がりも贖いの届きに対応しています。イエスはすべての人をご自身のもとに引き寄せると言われました。黙示録5章はその引き寄せが完成した時のビジョンです——あらゆる部族と舌と民と国から集められた収穫が、エルサレムの外で高く掲げられてすべてを変えられた方の前に立っています。

わたしたちはこの旅を、ニコデモが問いを抱えてイエスのもとを訪ねた夜の中に始めました。わたしたちはそれを御座の光の中に終えます——すべての問いが答えられ、よみがえられ、統治され、礼拝される小羊の御顔から輝き出しています。

十字架はイエスのものでした——意図的な選択、自発的な犠牲、代価が完全に支払われるまで与えられたイエスの体と魂。そして十字架はわたしたちのためでした。

復活の体の傷跡がその永遠の証拠です。

屠られた小羊はふさわしい。

アーメン。

● あなたの応答

すべての創造物が屠られた小羊を賛美しています。あなたはどのようにしてご自身の声を加えますか。

旅を続けてください

この三十日間があなたをイエスの言葉により注意深く耳を傾けさせる助けになったなら、物語は十字架で終わりません。

屠られた小羊は生きておられます。

十字架は最後の言葉ではありませんでした。復活がそうでした。

次の巻がその旅を続けます。

よみがえられた方…イエスによれば

復活から四十日間、イエスは弟子たちに現れ、聖書を開き、倒れた者を回復させ、従う者たちに使命を与え、聖霊の臨在の中での生活に彼らを備えられました。昇天の後も、イエスは聖霊を通じて地上でのご自身の働きを積極的に続けられました。

「よみがえられた方…イエスによれば」は、イースターから聖霊降臨祭までの五十日間のそれぞれのための黙想を提供します。すべての四つの福音書と使徒の働きから、時間的な順序でイエスの復活の言葉を追っていきます——この巻を形作ったのと同じ約束をもって：イエスのご自身の言葉で御業を解釈されます。

無料の贈り物：力の秘訣

多くの信者は十字架を理解しています。そこから生きる方法を理解している人は少ないのです。

「力の秘訣」は新約聖書の中で最も驚くべき真理の一つを探求します。キリストの力は弱さの中で完成されるということです。

このミニブックは以下からの無料ダウンロードとして入手できます。

www.johnstephenwright.com

イエス：聖書的伝記

四福音書から描かれた時間的叙述

キリストの生涯にさらに深く浸りたい読者のために：「イエス：聖書的伝記」は四福音書の流れるような時間的調和を提示し、聖書が一つの継続的な物語として語れるようにしています。

以前「イエス・サーガ」として出版されていたこの作品は、イースターでのリリースに向けて、拡張された明確さと洗練をもって新しいタイトルのもとで完全に改訂・再出版されています。

推測ではありません。フィクションでもありません。イエスの生涯が順番に辿ることができるように配置された聖書です。

つながり続けてください

イエスの生涯と教えに焦点を当てた将来の研究、默想的リソース、新刊をお受け取りになるには、以下をご訪問ください：

www.johnstephenwright.com

論争はありません。神学的な雑音也没有ありません。ただ、聖書の中のイエスへの持続的な注目だけです。